

全道展機関紙 "ZEN" 第16号 昭和61年4月22日発行
 発行所 全道美術協会 事務局 〒061-01 札幌市豊平区清田2-1-5-6
 久守昭嘉 011-882-3384
 印刷 中西印刷株式会社 011-781-7501
 編集委員 青木 淳子 小野寺紀子 坂口 清一

ZEN

全道展機関紙

No. 16

41回全道展作品公募

■搬入／6月18日(水)・19日(木) 札幌市民ギャラリー 午前10時～午後6時
 ■会期／7月2日(水)～7月13日(日) 札幌市民ギャラリー
 ■主催／全道美術協会・北海道新聞社

●出品を希望する方は返信用切手60円を添え、応募目録用紙を⑥〇六〇一九一札幌市中
 央区大通西三丁目北海道新聞社事業局文化事業部全道展係に請求下さい。昨年の応募
 者には送付します。また有名画材店頭にも置いてあります。

■巡回展開催地 旭川・網走・斜里・根室・帯広・釧路・中標津・美唄・室蘭・函館

新事務局偶感

事務局長 久守 昭嘉



昨年全国展は、四〇周年記念展という節目を、大きな成果を上げて終了した。しかしその会期中に前事務局局長・後藤庸也氏が急死され

るといふ痛ましい事態が起こり、驚愕、動転した。思えば記念展ということで、事務局の仕事は多忙を極めた。後藤氏はその陳頭に立って、計画から実行へと、ひた向きに頑張っ

て居られた。体調悪化を表には見せまいとして、必死に取組んでおられた姿は悲愴であった。誰よりも全道展を愛し、一途に会に尽された人である。

会の組織も年毎に発展膨大化し、事務局の仕事も複雑になっていた。私は、会務を会員相互に分担して少しでも軽減する必要があると判断、新しい事務局は機構の改革が必要であると提案し、その改善に着手した。会

務委員会、拡大会務委員会と幾日にもわたる厳しい検討を経て八月下旬、現在の事務局の新体制が生まれた。事務局は局長の外、会計、事業、企画、庶務と四部五人体制、さらに会務委員が各部に所属、十七名の会務委員会の構成になった。

私の新事務局長就任については強く辞退したにもかかわらず、結局事務局次長(会計)であったことから、現時点で事務局の内容を一番よく把握している一人として推された。

事務局長などと云う器ではないが、引き受けた以上、その責任を何んとか果さなければと考えている。皆様のご協力をお願いする次第である。

全道展の将来を考える時、その前途には難問が山積している。

四〇周年記念画集の中で本田明二氏は言われている、「惰性から生れるマンネリズムがありはしないか、組織にコレステロールがたま

っていないか、…この時こそ謙虚に、しかも真剣に自己批判することこそ必要なことではないだろうか」と。今、我々はこの言葉に素直に耳を傾けねばならないと思う。今年には会員の出品作品の大きさが、制限されることになった。年々展示作品の増加する中では、致し方ないことだ。会員は大きさよりも質的に高い魅力ある作品こそ第一と考えたい。今年も三日間に亘る審査は、厳しく激論を交わし、問題のある作品については会員同士納得のいくまで話合う。いい作品は見落さない。基本的な審査に対する姿勢は絶対に崩さず、若い、いい芽を見つけて育てることを使命としたい。意欲的で創造性豊かな作品が続々寄せられることを切に願うものである。

第28回学生美術全道展

搬入／10月1日(水) 札幌市民ギャラリー
 会期／10月8日(水)～12日(日)
 会場／札幌市民ギャラリー

搬入は、札幌市民ギャラリーです。応募用紙は、有名画材店又は⑥〇一九一札幌市中央区大通西三丁目北海道新聞社事業局文化事業部全道展係へ返信用切手60円を添えて請求下さい。

事務局長 久 守 昭 嘉
" 次長 藤 井 正

事 務 局		会 務 委 員	
会計部	藤井 正	小関恵久子／佐藤 靖	
事業部	岸本 裕躬	長谷川忠男／伊藤 寿朗	
		木村 富秋／伏木田光夫	
企画部	玉村 拓也	大地 康雄／竹岡 羊子	
		関原 範子	
庶務部	斎藤 洪人	坂口 清一／谷内 丞	
		手島圭三郎	

六十年度は記念展の関係もあり約一七〇〇万円の予算運営をしています。この予算は事業内容からいって決して多いとはいえませんが、むしろ、内容の一層の充実、作業の効率化を図るためにこの予算ではと思う面が多々あります。さらに、本展を目指して会務委員各位が年間通じて事業の遂行のために、かなりの時間をさいて頑張っている実態も看過できません。

さて、会務運営が本格的に新たに組織化されたのに伴ない、予算もそれに見合うように編成されなければなりません。そのため現在その係数整理の最中ですが、会費の未納の方がまだ相当数いらっしゃるのを頭をいためております。至急納入方をお願いします。

岸本 裕躬

ともあれ、貴重な予算を適正運営し、皆さんの要望に応えるよう努力をいたします。

今後の指針を示す努力を

四十周年記念展を昨年終えて全道展も四〇代最初の展覧会を歩む年に入るので、今後の指針を示す大切な事業内容となるよう努力したいと思う。

現在までの歩みの中で多くの問題点や改善対策を必要とする諸々の課題を山積して来ているが、膨張した種々の条件が総ての推進に及ぶ影響を投げかけて動きをにぶらせている点に於いて皆が現実面の自覚を持ってよりベターな方向性にする熱意を持って対処すれば打開できる余の地は充分あると考えられる。

本展での今年の大きな対策として絵画会員の号数制限(ヨコのみ一六二cm以内)が決められたことで、入選者の壁面緩和に効力を得ることができ、最少とはいえども新人の発掘育成に従来の枠を保持できることを期待する方策をとった。会友、一般の制限はなく(一部門を除き)今まで通りである。展示壁面について今回の会員制限が特に鑑賞効果に有効大になるという過大な安心はまだまだ出品者増大の年毎積み重ねを考えると無理であり、あくまでも二段掛け壁面を現状維持に止める

国内の期待度と予想している。

巡回展については、会員数が増加して、各地区会場内に全作品の展示ができなくなりつつあり、飽和状態が出始めたこと。そのため作品数の縮減で毎度毎交替出品を考慮中である。まだ多くの諸問題があるが逐次報告し

企
画
部

玉村
拓也

和と連帯を求めて

企画部を引き受けてから半年ほどになりますが、新しい組織ということで、誠に集会が多く、事務局会議を中心に会務委員会議、拡大委員会議、各部会議などが続き、その間には企画展、新年会などの準備から後始末まで多事、多難の半年間でした。

更に、これから本展に向けて一段と忙しくなることを思えば、一人で背負われた今までの事務局長の苦勞がよく解ります。

さて、企画部の業務内容をご紹介します。
す。大別して二つのブロックになるとおもいま
す。

一、企画展、講演会、美術講習会などの催し
プランニング

二、表彰式、懇親会、新年恒例会などのパーティプランニング

八千年の営み「黄河文明展」

10月11日、月3日
道立近代美術館

てゆきたい。四月の道新紙上での応募告に注視して頂き、活気のある自由な表現での作品を送り込んで下さるよう期待している。一般応募者に注意してもらう点として出品目録記載もれない記入をお願いしたい。

本展は先史時代から唐代にいたる大
黄河文明八千年の壮大な歩みを、流域

の各省などから出品の考古美術品百三十余点と豊富な補助資料で紹介します

庶務部

斎藤 洪人

活性化の要として

などの仕事を任されていますが、企画展の中には、受賞者招待展、会員小品展、遺作展などがあります。又、パーティー関係では、本展懇親会、会員懇親会、忘、新年会などが年間のプログラムとして設定されています。

これらの仕事は、本展業務のような作品発表を義務づけられたハードな中心部門と異なり、企画部は会の側面から支えて行く親睦を主としたソフトな和の部門と云えます。人と人との触れ合いの場を作り、理解と向上を生み、相互の連帯を高める大切な役割を受け持つ部門であります。

事務局の機構が変わって、私は庶務部を担当することになった。こうして事務局を四部構成にして、それぞれの部の仕事を洗い出していくと、今まで混然としていた事務局の仕事がひとつひとつ明確になって、一つの集団を維持していくことが、どれほどのエネルギーに支えられているのか、今更のように驚くのである。全道展も四十年を過ぎ、他の会同様、公募団体が担う宿命のようなものを感じている。いつまでも若い全道展であるためにこの機構改革が意味を持たなければと、決意を新たにしている。

庶務部の大きな仕事は、本展の画集の編集と、機関紙「ZEN」の編集である。その他、会報の発行と諸会議の記録、本展ポスター、案内状、入場券等の作成、その他会の歴史的資料の収集と保管など、会の活性化をはかる要としての存在に責任を感じている。

40周年
記念

全道展巡回展奮戦記 (5)

函館・斜里

■ 函館展 ■

9/26
〜
10/1

会 員 鶴 川 五 郎

●従来の行きがかりから本町の丸井デパートの6階の一部を継続使用しています。
●30回展ころから地区展が再開され、以後40回展まで続けてきましたが、パネルは古ぼけ、壁面は汚れてあまり汚えません。
●加えて、年々巡回展点数が増える一方で、陳列に四苦八苦するのは例年のことです。
●40回展は大型のものを巡回から外した関係で、何年ぶりにきばった会場構



成ができました。

●しかし、41回展からは号数制限で、巡回作品がまたぞろ増加するとなれば、地区としては再び大変なことになるそうです。
●やはりこの辺で、巡回展そのものの合理的再検討が必要ではないでしょうか。つまり、札幌展の作品を一方向的にイーजीに送るのではなく、地区の、状況、会場、巡回の主旨または希望等を組み込んで、それ相応の作品をセレクトはできないものか。

■ 斜里展 ■

8/9
〜
13斜里町教育委員会
社会教育課長 阿部 広太郎

斜里町開基百年を記念し、初めて全道展を当町で開催したのは昭和五十三年である。以来、決して派手さは無いながらも厳しい財政条件下で継続して開催し、はや今年で第九回を迎えるに至った。

斜里と言えは、まず『秘境知床』のイメージがすぐうかぶように、知床の自然に支えられた人口一万六千人の、農業と漁業と観光の町である。その豊かな自然とそこに住む人を素材に、様々な分野での文化・芸術活動が盛んに行なわれている。特に写真界には愛好者が多く、北辺の田舎町で『ハッセル』や『リンホフ』の話題にも事欠かないありさまである。そんな芸術感溢れる当町での、毎年の全道展と写真道展の開催は、高度な芸術に町民が直接触れることができる極めて重要な催しである。そして、これらを継続して開催できたのも、多くの

先輩達の苦勞と熱意の賜物である事は言うまでもない。

斜里での開催は毎年七月末から八月月上旬が多く、オホーツク海沿岸と言えどもこの時期だけは年間を通じて特に暑い。エレベーターも無い古い中央公民館の二階への作品の搬入は、毎年『全道展サウナ』と呼ばれる、職員恒例の年中行事となっている。特に、芸術的感受性の人一倍貧困な我々には『コンクリートの塊』や『木の根』、『裸婦像』など大作の搬入は、まさに強制労働そのものの苦しみであった。

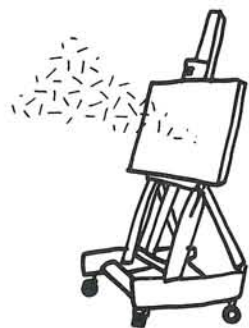
また、数年前にはちようど公民館の改修と開催期間が重なった事があった。改修だけならまだ良いものを、屋根の張り替えまで行なう事になってしまったから大変である。晴れてさえいけば心配無いが、貴重な



第41回全道展 巡回展日程

7月18日〜30日	旭川展	旭川西武A館8階西武ホール
8月1日〜6日	網走展	網走市立美術館
8月8日〜14日	斜里展	斜里町中央公民館
8月16日〜19日	根室展	根室市公民館
8月21日〜26日	帯広展	帯広市公民館
8月28日〜9月2日	釧路展	釧路市公民館
9月3日〜9日	中標津展	中標津町公民館
9月11日〜15日	美唄展	美唄市公民館
9月18日〜23日	室蘭展	室蘭市文化センター
9月25日〜30日	函館展	丸井今井・函館

作品を濡らしては一大事、シートを傍に二日間空ばかり眺めていた。運良く天気も崩れず二日目の夜には工事の現場監督と、星空を眺めながら裸婦像を肴に酒を酌みかわしたのも、今は楽しい思い出の一つである。





油 絵
徳丸 滋

躍動の季節



版 画
森 ヒロコ

燦めく小宇宙

会員は今・会員は今・会員は今・会員は今・会員は今・会員は今・会員は今・会員は今・会員は今・会員は今

俄かに北から南へ白い雪が流れる。青い空も白い山も、セピア色の森も、雪に包まれて乳白色になる。太陽だけがオレンジ色に輝いている。太陽の前を横切る雪の陰だけが早く動いている。山の稜線がすかに見えはじめ、太陽は下の部分から徐々に、欠けていく。コロナを残して日は沈む。まるで日食のような落日だ。飛ぶ雪は束になつて、黒い沼に吸い込まれていった。

今年は雪の多い冬だった。春になった今も、アトリエの窓は雪で覆われていて薄暗い。この分で行くと根雪が消えるのは多分、五月の上旬になるだろう。雪のあるうちは裏山を歩くのを日課としている。夏のあいだは、笹が深くても歩けないが、冬から春にかけては深い森の中へ楽に入っている。森の中は、毎日同じ様相を示し、ゆったりとした流れで季節が移り変っていく。だが山での出来事は、同じくくりかえしがない。歩くたびに新たな感動を味わい、飽きることがない。とくにその中で生活する動物の生命力と、多様さに驚き、魅せられている。雪のある山では、樹木をスケッチすることが多い。春になると芽も大きくなり、寒い間耐えていた力を一べんに吹き出すようにしている。葉を出す前の赤くなった

梢の色は、四季のなかで一番美しい。全エネルギーを芽に集めていて、静かだが躍動感がある。山の北側の斜面にかなり広いダケカンパの森がある。その森を一度外側から描いてみたいと思っているのだが、あまり大きすぎて、美しすぎて、絵にすることが出来ない、又、約六ヶ月間、毎日眺めている雪も描きたいのだが、これも、なかなか絵にすることが出来ないでいる。

ほとんどの木は天を指している。それは宙から来るエネルギーを一身に集め、地球へ送るための形である。その造形の線は、生命を維持するための必要最小限のものであり無駄がなく美しい。そんな大樹に触れてみると、ゆっくりと揺れ動いている。その大きな振動が、自分の振動と同じになることを願っているのだが、樹の偉大さには、とてもかかわらない。

この森の中で、動植物を凝視し、対話し、生命の原点を確めながら、絵を描いていた。

家の中で、群れて越冬していたカメムシも、雪が消え外へ飛び出すのを待っている。私も、全道展がはじまり、そこで、先輩や仲間たちの健在ぶりに出会うのを、楽しみにしている。

友人に映画好きは多いのだが、中でも驚いた事に、年間一二〇本見たという人がいた。勿論、彼女は映画関係者ではない。映画の評を聞いてみると、時々「よくわからなかった」と言う。「よくわからなかった」ので、三度見たけれど、益々わからなくなった。」と答えてくれた事もある。こんな時、私はほとんど、感動してしまう。私の絵画に対する興味は彼女の映画に対する興味より、はるかに劣っている様な気がする。もっとも、私にしても、好きな展覧会でも一度しか行かないのに、好きな映画は二度見る気になるのだから、映画の勝ち！なのかもしれない。

時間的な事から言えば、私が一番長い時間携わるのは、家事である。二年前から、両親の居る小樽と夫の居る長沼との間を行ったり来たりしている。忙がしくなってきたが、元々家事は嫌いではない。二番目は、ボンヤリと空想にふけっている事で、三番目が、制作なのだ。

私のスケッチブックには、所々に文字がのっている。それは絵とは全く関係なく、ペーコン一〇〇g、タマネギ1/2コ、塩、胡椒少々、という具合に、いつも流しているラジオの「料理メモ」のメモなのだ。市場

に新海苔が出ると、生薑を入れて、佃煮を作りたくなるし、春、フキに出会うと、キヤラブキを煮たくなる。上手に煮上ったフキは黒々とつややかで美しく、それを友人に配って、お世辞にでも誉められると、無償に嬉しい。

作品も、日常生活の中での出会いから生れる事が多い。新聞の片隅の小さな写真の忘れられない表情とか、道路に墜落していたトンボ、魚の中から出てきた。小さな虫だとか。ただ作品にする場合は、私はそれを出来る限り遠くへ連れ去りたいと思う。現実の場所から、ボンと投げだされた遠い所で、それらを中心に、硬質な、小宇宙を創り出したいと思う。

私の料理は、ホドホドだから楽しいが、硬質な小宇宙は、ホドホドでは出来ないの。その作業は私にとって、決して楽しいとはいえない。しかし、現実への興味と、現実ではない世界への憧れが、私の中にある。うちは、この作業をやめるわけにいかない。最近、マンディアルグを良く読む。彼の小説の一つ一つには、彼が創りあげた、キラキラした宝石の様な小宇宙が、確かにある。



40周年記念全道展絵画部受賞候補作品審査

全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし



油 絵
砂田 陽子

40周年記念全道展
会友受賞

幼い頃の子守歌は、父のアトリエから聞こえるガリガリひっかくナイフの音でした。全道展は余りに真近にありすぎて、その魅力はかえって分りにくかったように思っています。描くとか、そうした雰囲気も見慣れているのに、昔も今も白いキャンバスに向かう時はとても恐い気がします。でも描いているうちに、いじくっているうちに、心が開いて来て、内奥の自分が出て来て突然調子が上って突っ走ります。うまくゆくかゆかぬかは出会ってみないと分らない、行き着く先が分らない、そんなヒリヒリする心をどう飼いつけて私を乗せるかが一番の事らしいのです。そして、ひとりでに画面が動き出すようになると安心します。全道展は、そんな身勝手な私の作画を見守って下さる温かい先輩達の集まりなのだと思います。今回は賞をいただいて驚きました。とても嬉しくなりました。ギリギリ迄出来ずに、身近の諸先生、友人達に多々の励ましをいただいたおかげと、大変に有り難く思ったものです。



油 絵
福井 路可

40周年記念全道展
記念受賞・新会友

十数年前になるであろうか、六月の或日の真夜中、富内の狭い教員住宅の押入れをベッド代りにしていたボクら四人兄弟が上下二人ずつ横臥していた布団の中で、取り留めもなく、将来・母の病氣・死・自分自身……の事が頭の中に渦巻いて眠れずに天井の木の目と睨めっこをしていたことがあった。——すると遅くまで酒を呑んでいたはずの親父の部屋から、ゴソガタという物音。テレビンの匂い。朝迄続く。

人々は同じインスタント食品を食い、同型の団地に住み、同じ流行の服装を身に纏い、同様に、同じ人気スターに熱狂し、同じ思想を採用する。こんな社会で成功するのは、平均的な性格を持つ頃から鼻にぬける才人、マスコミ、機械社会に乗り遅れない人達かもしれない。カンバスを前に目をギラギラさせて絵を描く奴らなどあまりにも野暮かもしれない。

——間もなく六月。焼酎をコーヒーに切り換え、またカンバスと睨めっこ。真夜中、ムッと立ち上がり、テレビンとシッカカーフに酔いながらガゴソと。夜明けまで続く。



油 絵
渡辺 貞之

40周年記念全道展
協会受賞

「我々は絶えず転落しているのではないだろうか? 後へ、横へ、前へ、又あらゆる方向へ転落しているのではないか? いったい上とか下とかは、あるのだろうか? 我々は無限の無を通して思い迷っているのではないだろうか? 空虚な空間の息吹きが我々に吹きかけられているのではないだろうか? 益々寒くなってきたのではないだろうか? (ニーチェ「狂人」という断章)」

このような文に出逢いました。今の私の中にある絵画のイメージは、言葉で言えば、真に「混沌」としたもので、しかも年々その様相が強くなっていくようです。このイメージの混沌さは、いかなる故なのか私自身にも解らないままになっていたのですが、この文に出逢って氷解したと思います。

ゴヤの場合、人間を人間性を失ったもの死ねば動物の屍体さながらに放り捨てられてしまふ存在としてフリードリヒの場合、人間は悪魔の世界において見捨てられただけでなく自然の中においても見捨てられた存在として描いていたように私も人間の混沌さに気付いていたようです。

全道展にそんな私を問うてみたいのです。



油 絵
矢元 政行

40周年記念全道展
道新賞受賞



油 絵
福井 バク

40周年記念全道展
佳作賞受賞



油 絵
松浦 章博

40周年記念全道展
佳作賞受賞



版 画
美水 まどか

40周年記念全道展
佳作賞受賞

せまい六畳の部屋、アトリエというより物置で家族が寝静まってから蛍光灯の明りでキャンパスに向うのが日課です。当然、絵を描く時間も制約されるので、ぐずぐず考えている暇はない。最低、必ず一日一回は絵筆を5分でも10分でも持つようにしているが、いつも睡眠との闘いである。

冬は寒く、夏は猛烈に暑い鉄筋のアパート、100号120号130号の描きかけのキャンパスが5点、そして床に静物モチーフと油絵具オイル瓶、絵筆……などが散乱し(二週間に一度は整理するが)足の踏み場もない。

全道展は、旭川在住の時に神田一明氏の勧めで出品し初入选以来もう十年、その間名寄、室蘭、登別と転居し一度落選の苦しみ味わいながらも挫折せず何とか自分の画境で無我夢中で絵を描いてきたように思われます。自分自身も三十代に入りモチーフも室内から野外のグラウンドや運動場など広い空間で遊ぶ子供達、人々……を画面の中に表現しようとして描いています。

搬入直前まで、当分時間と気分がものをいう苦しい日が続きますが自分の持ち味を深めながら新しいものに挑戦しようと思う。

全道展を見た時、出品したくなっていた。僕は、全道展を見たのは、どんぐり会に在った頃だった。

最近散歩をしている。朝になると白い木が気にかかる。

自分自身の立体の何かを見てみたい。林武の絵、里見の絵、ヨロズ。やっぱり立体派。

絵を描く、チューブの色が新セシだやわらかい光が部屋の中に入ってくるホワイ。ホワイ。ホワイ。

今年も全道展に出品できることがうれしい。

僕と全道展の出会い、今から11年前の30周年記念展の時までさかのぼる。僕が主宰している研究所から生徒が入選して見にいったのが切っ掛けになった。その時は高橋要さんが30周年記念賞を受賞していた。その記念賞の作品に会場が高橋要さんが加筆していたと研究所の生徒が驚いていたのを僕は覚えている。それから僕は11年の間、毎年、全道展をみてきた。その11年の間、僕はいろんな作品や作家と出会った。

木村忠太の作品と出会い、ギリシャのキエラデスやヘンリームーアの彫刻を知った。佐藤忠良さんとも出会った。4年前の銀座でやっていた僕の個展に来てくれた。2時間程のなごやかな時だった。毎日13時間もアトリエにいらるといふ忠良さんは光ってみえた。これらの出会いは、僕の奥深い所で強い光を放つ。僕はこれからも出会いを大切にしたいと思っている。出会いが人生を作る。出会いを大切にしない人は、人生を大切にしない人だと思う。

全道展と出会って11年目の40周年記念展に僕は初めて出品した。又、光を放つ出会いがきつとあると、今僕は思っている。

今年は、冬が長く、春がとても待ち遠しい。六月になれば札幌競馬が始まる。私が、競走馬に興味を持ち、モチーフにするようになってから数年になる。毎年、数々のドラマが繰り返されるが、次々と登場する馬を追うだけであつという間にシーズンが終つてしまふ。ほとんどの馬は忘れられてしまい、記憶に残る馬はほんの一握りだ。馬の姿は、見る角度によって、思いの他に変化する。ほっそりしているかと思うと、たくましく、また、エレガントな時もある。性格も様々で、気性の激しい馬もいれば、大人しい馬もいる。

出走前のスタンドやパドックは意外に静かで、人々は研究に余念がない。そんな雰囲気なかで、騎手の色とりどりのコスチュームが、馬場の芝の緑に映えて美しい。私は、これまでそうした静かな情景ばかりを描いてきた。競馬場には、いろいろなモチーフが沢山ある。競走中の馬のせり合い、観客の喚声、ゴール時のどよめき……。そして今は、疾走する馬群の瞬間を捉えることに苦労している。

全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし

全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし

彫 刻
田中 隆行40周年記念全道展
協会賞受賞・新会友彫 刻
池田 譲40周年記念全道展
道新賞受賞工 芸
福井 伸一40周年記念全道展
記念賞受賞工 芸
高野 陽子40周年記念全道展
道新賞受賞

私と全道展との出逢いは、彼此十一年前私が釧路教育大に学び、彫刻をはじめた頃であった。当時、巡回展で初めて全道展を観る。故本郷新氏の「彫刻家H氏像」を観た感動は今でも忘れていない。それまで、モデルとそっくり作ろうとしていた私の彫刻に対する考えが一瞬の内に覆えられた。荒々しい肉付け、がっちりとした塊の強さから内面を表出させる有機的力、これが、彫刻だと思った。「よし、全道展に出してやろう」と、技法も何も知らぬまま制作に励んだ。翌年、二つの首を抱き、釧路から純行からまっすぐに乗りこむ。早朝、札幌着、金もなし搬入時刻まで駅でたむろ。学校から無断借用した石の台二個と作品二個を両手に持ち歩く。たいした距離ではないと思っただけで、行くほどに重みは増す。足はがに股、早く着きたい気持ちから小走りになる。一頃はやったエリマキトカゲ風走行になる。都会の人達はそんな私の姿をジロジロ見て笑っていた。今思うとまったく珍道中初出品であったが、全道展に対する新鮮な思いがあった。以後、全道展は私の制作活動の一つの節目となっている。

全道展に出品し始めて五年になります。石材店に勤めるかたわら、自分の好きな石彫をやっています。毎年四月初めごろから全道展の制作にかかりますが、素材が石だけに時間と体力を使います。固いし、重いし、金がかかるし、何んでこんなものと思えますが、好きだからしょうがありません。制作の最終段階で磨きをかけるのですが、この時が一番楽しい、そのときの触感が何んとも云えずいいのです。石の肌のぬくもりを感じます。

会期中のみなさんの作品をみるのも非常に楽しみです。いろいろなと自問自答しながら見て廻ります。

自分の仕事でこの頃思う事です、機械、工具類の便利さから安易にそれに頼り過ぎて、石と直に触れ合うという基本的な事を忘れていたような気がします。年中石と関わり合っている仕事をしているためか、石に対して傲慢になってしまい、それがものの見方に落し穴となつてあらわれてきそうです。

——なぜか一石二彫というのにもままにならなくなってきた今日この頃です。

四年前の三十七回展が初めての出品でした。私にとって、雲の上よりもはるかに遠い存在であった美術展覧会が、すぐ手の届くものとなった時は、さすがに不思議な思いがしたものです。美術的環境とは無縁の身で育った私には、天と地が逆さになった思いでした。自分も全道展の出品者なんだと大声で言えるのはこれから先、何回目の出品の時だろう。おそらく自分の作品に対して、自信が持て、胸をはって搬入できた日、その日ではないかと思えます。半心半疑で出品者から脱皮し、必ずや、その日を迎えることができるよう、良い作品への弛まない追求心を持ち続け、その時々で満足することなく、制作の新しい朝（あした）に向かつて努力していきたいと思えます。

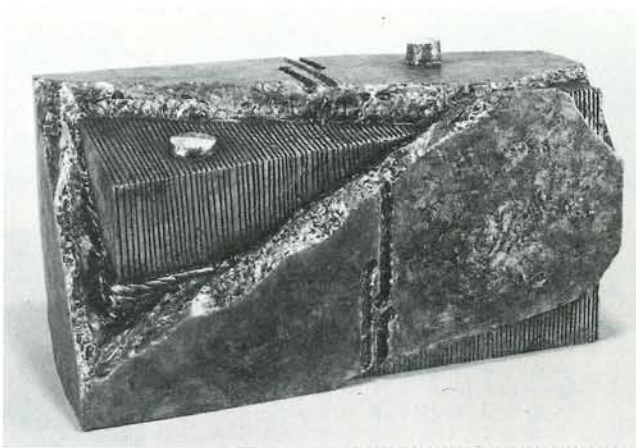
そろそろ、雪溶けもすすみ、次の四十一回展に向け始動です。もちろん出品させて頂くつもりです。全道展という長くまつづくに敷かれたレールの上を脱線することなく、未熟な私でも「継続は力なり」という言葉通り、これから何作目の作品になるのか、「すばらしい作品だ」と言われるよう制作活動に邁進していくつもりであります。

六年目に第一回目の個展をバレスギヤリーで開催した時に現在全道展工芸会友でいらつしやる岩本テル子さんが偶然通りかかり会場を見て下さり、その時に「全道展という公募展がありますから公募なさってはいかがですか」とお声をかけられ半信半疑で公募したのが初出品初入選、そしてそれが全道展と私の遭遇です。搬入日に他の作品を見て、自分の作品がなんともはずかしく裸の私を晒しているようでそのまま持つて帰ろうかと思つたのを昨日のように覚えています。去年は五年目という節目もあり意欲的に制作した結果、道新賞を受賞することができ、ようやくほんとうの意味でのスタートラインに立った感じです。

自分の進むべき作風は現代的なフォルムの造形、力強い動きと空間性を持ち女性らしい柔らかなラインをシンプルに表現できればと思います。そして焼成によって更に美しい変化をかもしだしそれが炎の芸術となるのです。

これからも全道展と共に素直に成長してゆきたいと思っております。

わが思索と行動



私と工芸との出会いは、はじめ単なる日常の平面的な装飾品が主であり、色や形にこだわりをもちながら作品づくりだった。いつかその中に自分の心象風景を表現できないものかと思索しているうちに、現在の鑄金の仕事となった。

また、私の子供の頃は鍛冶屋や、馬の蹄鉄屋が近所にあり、火床から取り出したまっ赤な鉄が金床の上で火花を散らしながら鍛打ちされるのを、暗い作業場の片隅で、終日あきもせずながめていた。なつかしい思い出である。

— 私と金属造形 —

鳴海 アツ



工芸はもとも用途性、機能が重視されていた。したがって、用をいかに満たすかが造形の基本であった。しかし用途性や機能性にこだわりすぎると特定の枠の中でしか表現活動が出来ず、窮屈なものとなり、のびのびと制作が出来なくなってしまう。だからそんな枠から抜け出して、自分の内面を表現したいと思う。私の作品の底に流れているもの、一つに内面的な心象の具現を、どう表現できるか用や機能という概念から、どうはみだした

また私の作品は精密度を求められるものではないが、精度は大切な要因としている。作品を造るということは、私にとって脱皮のようなものであって、自分なりに完成したと思っていた作品が造ってしまうと、もうすでに過去のものとなり、次の作品への足がかりとしか存在価値がなくなっている。しかし蠅が脱皮する度に、大きく成長していくのと同じように、自分の内面的な高まりがあったことはたしかである。作品について具体的にいうと、七年ほど前から、連作で「つつむ」という作品を創りつけているのですが……。

英木のり子

「わたしが一番きれいだったとき」より
わたしが一番きれいだったとき
だれもやさしい贈物を
捧げてくれなかった
男たちは拳手の礼しか知らなくて
きれいな眼差だけを残し
皆発っていった……

いと思われていたものうちに非常に暖かなものを感じた時には感動的でさえあった。この仕事を始めるにあたって、女にとっては、一般に金属は取り付きにくいといわれるけれども私にとっては、子供の頃から遊具などで金属との出会いがあり、金属があつたことには興味があり、好きでもあ

私の父は青函局に勤めていて、連絡船に乗務していました。船から降りてくると、日夜の区別なく板金屋のまねごとをしていました。それを見て育ったということもあり、金属は私の身近なものだった。このようなことが、いつか私を金属造形への道へと向かわせるようになったと思う。

面白いという事の追求がある。また形だけでなく色についても、色を限って制作していると素材の持つ質感が逆に色を豊富に見せる。モノクロの映画がより豊かな色を感じさせるように。一方、私と作品との係わりで、たんに現代に生きるから現代を意識して作品を創り出した時に初めて、現代的な作品と云えるのではないかと思います。だから私は現代を意識した作品づくりをつねに心がけている者の一人である。

と詩人が詩った頃、私はやっと大人の世界がわかりかけた頃だった。理不尽な世の中の何もかも腹をたて、本来であれば与えられて当然と思った精神的、物質的なものが戦争のため、次々と手からこぼれ落ちるさまを、地団駄ふんでみていたものだった。永い年月のあいだに、いつしかそんな思いもすっかり忘れてしまった。ある時、鶴川五郎さんの個展を観て、その頃の思いがどきにふき出し『わすれられた贈物(つつむ)』となった。



全道展新年会 61.1.11 共済サロン

去る一月十一日全道展恒例の新年会が共済サロンで出品者多数一堂に会し盛大に開催された。年々参加者が増え今年等は出品者は八〇名を超え招待者を加えると一〇〇名の大台にのった。当日は厳しい寒さの中にも穏やかな日差しが加わり会場へつめかける出足よく、先着〇〇名様へ記念品が配布されたり、予定時間よりは早目に会場一杯華やいだ雰囲気を感じて出していた。定刻を少し回ったところで企画部の玉村キャップより厳かな口調で開会宣言、久守新事務局長より「四〇周年の歴史の上で四十一回展に全力を尽そう……よろしく」と挨拶、続いて小川原創立会員から協会を代表して「全道展では今若いエネルギーが欲しい時……傑作をつくって欲しい……」と挨拶、阿部北海道新聞事業局長から激励の御言葉を戴き、竹岡和田男道新編集委員が乾杯の音頭をとりスムーズに会食へと移行。詩情豊かなロマンの街さっぽろのネオンも美しく映るころ、アルコールもまわり、見事なご馳走に



動線を重ね、人と人との和やかな交流が始まる。この日ばかりはフォーマルな会話はやば、ほんのりとアルコールに誘われるムードの中でダイレクティブなハートとハートで行きかう一時は新年会ならではの盛り上がりである。余興の部では嗜好を変え、特別企画としてステージを提供、国松登龍こと国松登氏の手品、ホンダスキーウマノビッチこと本田明二氏のロシア民謡を心いくまで鑑賞。一応格調高い内容で盛り上げた。後半の抽選会は、受付時にカラ一十五色を使い各色七、八名とし、ブロック毎ゲーム大会で賞品を当てる方式を採用、オーク画材太丸藤井、松山額縁店、道新さん等がこの日の為に寄せられた見栄えする記念品で参加者を魅了。中央に椅子席をセット食べ飲み放題の中で時の経つのを忘れ一次会は打ち上げ二次会へご案内。二次会は又いつもの会場を変えカーテンコールを会場に六〇名を数える盛況、飲む語る唄う踊るの四拍子揃え、仲間意識を高揚させ



楽しくハモルこと一二〇分を超えさっぽろの街の夜もとっぷり暮れる頃、三次会へ流れる各々のグループが思い思いにススキノのネオンの中へと吸い込まれていった。最後に参加者の感想の一部を述べてまとめたい。
①私のステージも企画して(T・S) ②踊りたかった ③イモ焼酎が飲みたかった ④話し相手が欲しかった



った⑤壁の花で散った⑥料理がおいしかった⑦楽しく過ごせた⑧ご馳走に満足⑨プレゼントもつと立派なもの欲しかった⑩賞品に豪華な協会賞を出してはどうか⑪立ち席から指定席方式を⑫実年齢に對して落ち着いた会場を⑬二次会会場は一次会と異なり面白かった以上。
(文責 大地 康雄)

全道展 旭川地区からの便り

遠山隆義

春の雪解けと共に各学校の卒業式のシーズンだが、全道展は会期もせまりこれからが本番である。戦後二十八年の第一回移動展から初まり、三十四年の七回展には開催場所の都合により中止せざるをえなく、その後四十五年、二十五回展より現在に至っている。会場も最初マルセンデパート、次にマルカッ、文化会館と変り此の二年間は西武デパートにお世話になっている。

今では旭川の恒例の行事となり、市民の心に深く根を降している。此の地方文化の基礎を築いたのは、今は亡き高橋北修先生の並々ならぬ御苦労があったからこそだと思います。出品者も年々増加し現在では六十人前後ですが、特に女性に四三分をしめ、ひと昔前までは考えられない事です。そのメンバーも多士済済で、思いつくままスケッチして見たいと思います。

まず会員では、身近な静物をテーマに描き続ける支部長の森田喜昇氏。長年人間の内面を追求してやまない事務局の高橋三加子氏。シャープな感覚で青い透明の世界を描く神田一明氏。海のシリーズから脱皮しつつある高橋要氏。又重厚な作品で知られる神田比呂子氏。モノクロの美しい世界を見せてくれる木版の萩原常吉氏。他に工芸の押川清氏。一方会友で、平間正造、金沢実剛氏は、この会のベテランで良き理解者でもある。このところ協会賞、会友推挙とホームランが続く、酒井俊行氏。スケールの大きい作品で勝負する本条康伸氏。雄大なヒマラヤを銅版の世界で表現する渋谷正己氏。など会友の今後の活躍に期待したいところだ。

又一般で、連続受賞の渡辺貞之氏はこの地区のピカ一だが、あとに続こうと、激しい気迫で世まる新人群。重厚で迫力ある作品に取りくむ、ベテランの作家達。ユニークの中にしっかりとデッサンを見せる作品で注目したい女性群。など今後活躍に期待されるところ大です。

この作家達の競演を楽しむに民が多い事は、開催地にとって大変喜ばしい事であると同時に、これらも郷土旭川の文化に、多少なりとも貢献できるものと思います。

全道展 釧路地区の昨今

斉藤一明

雪だけのたまり水を、車がしぶきをあげて駆けぬける。永かった冬から抜けだすのも近い。

昨年に引き続き、今年の巡回展も日程が決り、訪れる春と共に巡回展準備にとりかかるころになった。

釧路の美術人口は、協会組織の団体や、大小のサークル、無所属と巾広く層も厚い。全道展関係は釧路管内も含め三〇名を越え、それぞれの場で制作が行なわれている。そうした中の一人、富田伸一氏が、この度(二月)「第八回寺島春雄賞」佳作受賞者として選ばれたのは、明るい出来事だった。

同賞は昭和四十一年に長逝した全道展会員でもあった寺島春雄にちなんで創設され、十勝、釧路管内の地方画家発掘を目的とするものである。今回は十勝に本賞を持つていかれたものの、前回では深谷榮樹氏も受賞している。これを励みに一層の精進と活躍が期待されよう。

この四月の開校をめざして、中江紀洋氏による美術専門学校が誕生する。名称を「オリエンタル・アカデミー・デ・ボザール」。

立体造形から平面造形、基礎科、専攻科と初心者から作家への育成と、本格的な美術校として、この地におよぼす成果は大きい。飛躍と発展を念じる。

永年全道展に出品を続けていた藤村正豪氏が二月二十八日、長逝された。心不全だった。

二十年ほど前の初出品から、入選歴十五回の常連であった。「全道展が好きだから……」と、病をえて休みがちであった近年まで、いちずに発表の場を全道展に求め続けた姿には、今となってはいたみを感じる。

昨秋、市内の団体展にみせた「黒い河」P50号は、発表の場での遺作となった。ほとんど色彩を失った黒の心象風景は暗示的でもあった。

すべて実力本意の世界とはいえず、若い感性の台頭するなか、ただひたすら、己れを求め続けるこれらの作家に、のべる手はないものかと、ふと思う。

全道展 室蘭地区より

北浦晃

地方の展覧会が全道的に報道されることは少ないので、昨年から今年にかけての室蘭地区での展覧会について書く。まず「浜町ギャラリー」での高野次郎の久々の個展があった。佐久間恭子の別稿にあるように氏は本年二月死去されたが、社会的には仕事をしつづけたかに見えても画家としてはまだ昇り調子にある現役であることを見せつけた発表であった。同じ画廊では「能」をテーマにした工藤善蔵、想い出「テール」のタイトルで連作を並べた佐久間恭子の個展があった。一月には地区支部と画廊との共同企画で「全道展室蘭地区作家展」を開いた。

会員九名・会友二名・一般出品九名の二十名で五十号以内一点ずつという小規模なものであったが、同時期に市の文化センターで道展の巡回展が重なったため、地元紙などは「美術ファンにお年玉」の見出しを打ち、「地元紙」と「道展」の同時開催を報じるなどしたこともあり、冬場にもかかわらず多くの観客を集めて好評であった。

昨春秋、丸井今井デパートのギャラリーが従来の仮設的なものから、やや本格的なものに改装され、従来年末にかけて石塚貴羊史・熊谷善正・野本醇・北浦晃のそれぞれ大作を中心にした個展がほぼ連続的に開催された。また、同画廊では今春、佐野敏夫の版画展が予定されている。

地元の美術団体として室蘭美術協会があり、室蘭市文化センターで夏の会員展・秋の公募展が行っているが、昨年の公募展が五十年記念展となり、幹事長の浅山映知が記念行事推進のリーダーとして大活躍をしたのであるが、五十年前の創立会員としてパーティの壇上に立った高野次郎の姿が思い出される。この公募展の中から全道展への新人の進出が近年目立っており、今年も初出品を含めて多様な個性の新人が出品する予定なので期待していただきたい。昨年文化センターで開かれた展覧会で最も話題になったのは「西村貴久子遺作展」であった。

室蘭出身の故人の遺作が、野本醇等個人と室蘭市との努力に遺族山崎氏の協力があったコレクションされたものを市民に公開するために開いたのだが、札幌から竹岡和田男・羊子・鎌田俳捺子の各氏がおいでになり、竹岡さんが道新学芸欄でとり上げてくださった。氏のご好意は勿論だが批評家のペンを刺激しえた展覧会でもあった。

十一月二十四日朝、電話。「明日ノ教職員展ノ審査ニ行ケナクナッタ。急に入院スルコトニナツテシマツテ、手術モシナケレバナナイヨウダ、チヨット長ビクカモ知レナイ。作品ハデキテルカラ家ニ寄ツテ運ンデホシイ、ガクノガラスハ外シタ方ガヨイト思ウノデ智恵子ニ手伝ツテヤツテクレ、手数カケテスマナイ、又電話スル、ヨロシク……」

誰ひとりとして四日後の彼の急逝など予感するものがいただろうか。

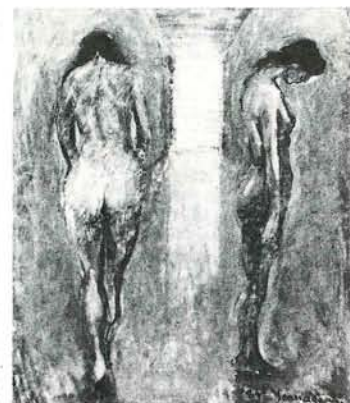
二十六日夜、智恵子奥様から電話、「ダメなんです、意識のあるうちに会ってやって下さい」エ、ナニ、マサカ……とにかく坂口清一さんに連絡、市立病院へ、五階の一人部屋、彼はしきりに右手を額に当てて痛みを訴える。すでに左半身は麻痺状態、「サカグチサン、コウジンサン……」と意識の灯はまだ消えていない。私は彼の頭に手を当ててひたすら奇跡を祈るのみ、翌日、彼は酸素室の人、そして二十九日早

追悼 山口惣市「信じられない」 斎藤 洪人



詩を語り
愛を語った

故山口 惣市



朝、彼は逝った。

何が起きたのだ、これは悪夢だ――

彼とは図録編集のしごとをよくやった。校正のときには大きな拡大鏡を持ち込んだ、街で飲むと「白石方面帰るぞ」の声、嵐玲子、藤島清士、前野昌市の白石メンバーと南郷で又一杯、おなじみのパターンが何年か続いた。昨年の十月、学生全道展で彼は陳列委員長をやった。打上げを地下街のライオンでやって、いつも通り白石へ、めずらしく渡会純也さんも同行したので、嵐さん、藤島さんが電話でよび出されて全員集合、ないことカラオケで彼の唄を聞いた。これが最後であった。

通夜の夜、本田明二さんも一緒に、彼の最後の呑み屋で彼を偲んだ。

私は今も、彼の死を信じることはできない。しかし。

昭和六十年十一月二十九日午前五時四十分、山口惣市没、病名 急性白血病

高野次郎さん逝き給う

佐久間 恭子



純粹・公平な人 故高野 次郎



鳩子夫人に抱かれた遺作

二月一日室蘭名物北西風と雪の朝計報を告げるベルが鳴った。一月お伺いした折の「若しや」の危具が現実になってしまった。その日から、何とか心の準備をしていた筈なのに、夕刻お顔に接した時は泣けてしまった。胸に短刀が置かれ横臥した次郎さんに唯々永い間お世話になった感謝を述べた。令息悠二君が（中学時代の教え子）私の肩に手を置き「先生を見てやってよ、親父キリストのようでしょう、良い顔でしょう」と言った。次郎さんにもうお年だからと諦めはもてない、30数年画父と敬じ甘えた私の思いと別に室蘭の文化芸術、広い芸能部門も含め、純粹公平で万人が「素晴らしい人」と畏敬する魅力を湛え、室蘭文化連盟会長、美術協会会長文学館設立期成会会長等の椅子に相応わしくその席に居られるだけで信望と安心を与えられた。だから私達は、共に居る誇りと楽しさを共有しダンディな次郎さんが好きでした。次郎さんは東京生れ叔父政也氏（中原悌次郎

人）の元中村来に師事、川端画学校修、後來蘭全道展8回より参加24回会員、独立展会友（野口弥太郎と親交）退職後鳩子夫人を伴いバリアアカデミーグラッドショウミエルに二年間遊学。画人の教養が浸み出る次郎さん。特に昨年は高揚し炎と燃えた年でした。六月油絵40数点の個展で若々しく、九月西村貴久子遺作展セレモニーで竹岡夫妻とリベリヤホテルの思い出話や旨い酒に満足、十月室美協50周年記念「窓辺の自画像」絶讃を浴びスピーチ「ただいたずらに馬齢を重ねて」の境地一同感銘。明けて一月病床から「全道展室蘭地区作家展」に自選作品と、画家の面目を果たされ、芸術を志す者にどう生きるかを示されました。終りに本年八月室蘭文化センターにて「遺作展」開催決定をお知らせし画友共に上天界のご冥福をお祈りします。

- 秋山沙走武彫刻展 (レリーフ)
10月 東京日本橋三越
- 大地康雄油絵個展
7/28〜8/2
時計台ギャラリーA室
- 近堂隆志個展
7/28〜8/2 ギャラリーポイント
東京銀座1丁目
- 森谷一画展
8/25〜30 資生堂ギャラリー 東京
都銀座8の8
- 森谷一小品展
4月 6月 8月 砂川コーヒーのぼし
- 森田喜昇個展
9/1〜6 時計台ギャラリー 札幌
- 藤井正・高志父子展
9/11〜9/16
- 嵐玲子個展
9/15〜20 時計台ギャラリー 札幌
- 松島正幸新作個展
9/16〜9/20 新作個展 東京資生
堂ギャラリーにて
- 高野陽子陽陶芸教室生徒展
9/25〜30 アートギャラリーさいと
う 札幌
- 本城義雄個展
10月に新築の公民館で町の画友と二人
展を開きます。
- 坪野秀子個展
11/3〜8 時計台ギャラリー 札幌
- 長谷川忠男個展
11/3〜8 時計台ギャラリー 札幌
- 青木淳子個展
11/10〜15 時計台ギャラリーAB室
札幌
- 木村訓夫個展
11/11〜16 アートホール 函館
- 原義行個展
11/17〜22 時計台ギャラリー 札幌
- 砂田友治70才記念展
12/17〜22 時計台ギャラリー 札幌
- 谷口一芳個展
87・3/23〜28 時計台ギャラリー
札幌
- 川本ヤスヒロ個展
87年3月下旬 大丸藤井セントラル3
階A室 札幌
- 水落啓個展
来年の早い時期に、オーストラリアの
ギャラリーNOで、個展をする予定で
す。初めての海外個展ですので、気合
いを入れて制作したいと思っています。
- 田中忠雄
61年度は全道展と行動展以外に発表の
予定はありませんが元気なうちにもう
一度個展の機会を得たいと思って毎日
イーゼルに向っています。

全道展に関するお問い合わせ
は次の所へ。

●全道展事務局/〒061-01 札
幌市豊平区清田2-1-5-6
☎011-882-3384 久守 昭嘉
●北海道新聞社事業局文化事業
部全道展担当/〒060-91 札幌
市中央区大通西3丁目
☎011-221-2111

●高野次郎画展が一月に亡くなられたこ
とを最近、銀座で人づてにきき驚いてい
ます。私が室蘭に在任していた頃、市議
会議長だった高野さんはバリ仕込みのダ
ンディな装いで、私たちをいつも高級バ
ーに連れていってくれたものです。胃の
切除後、急速に体が衰えたようでしたが、

●会員の高野次郎氏が、三月一日午前
時四十五分、心不全に肺炎を併発して、
御逝去されました。ここに謹んで御冥
福をお祈りします。尚八月八日(金)十
日室蘭文化センターで、高野次郎遺作展
を、室蘭美術協と、室蘭文化連盟共催で、
開催いたします。

四〇周年記念全道展画集 訂正箇所

- 図録訂正
一、氏名欄 リの欄→ヤの欄へ
二、住所欄 釧路町別保
三、図録訂正
誤 東山町字恵山
正 恵山町字恵山

●ZENの発刊が年一回になった
ZENの刊行起業者としてはいささか淋
しい思いがする。その理由は別途語られ
ると思うが、編集当事者は大変な労力を
募る中でもユニークな機関紙であり、
横のバイブ役としても、年一回の存在を
大切にしている度いものである。

●「人と作品」こう考えてみると案外作
者を知らないでみていることが多い。
然し、一端作者との出逢いからキャラ
クターやエスプリに触れ、改めてみる時
神髄を探ることが出来る気がする。
出来る限り出品者のニーズに応えるべ
く全道展の内容のある楽しい交流の場を
計画したいと思います。あなたもその時健
康でしたら、是非本展懇親会や新年会に

住所・電話番号・呼称変更と
転居
青木淳子 札幌市中央区南二条西九丁
目二一〇
高橋 要 五三番地
越谷賢一 五三番地
〒060-91 札幌市南区藤野五
条三丁目四三三・三

一画展グループ展案内

- 三箇三郎個展
期日無期限 2月16日現在527日目
五稜郭ニューギャラリー
- 一原有徳個展
3/15まで札幌NDA画廊企画展
3月中旬(日未定)仙台ギャラリー青城
企画展 6月上旬(日未定)東京ヒルサ
イドギャラリー企画展 9/1〜6大
阪画廊みやざき企画展
- 竹岡羊子個展
3/3〜8・東京文芸春秋画廊個展・
5/12〜17・時計台ギャラリー個展・
10/21〜26・福岡市美術館個展
- 押川清個展
3/6〜3/11 プランタンデパート
個展
9/2〜9/8 札幌パークホテル個
展
- グループ・朝展(神田、岸本、木村訓、
野本、福井、伏木田)
1986年3/17〜22 札幌時計台ギャラ
リー
- 36会デッサン展(嵐、渋谷、竹内、谷
口、本田、渡会参加)
4/3〜8 アートギャラリーさいと
う札幌
- グループ・燦展(八木伸子)
4/8〜12 東京銀座三越
- 八木伸子個展
7/14〜19 大同ギャラリー札幌
- 高橋要個展
4/14〜19 時計台ギャラリーAB室
札幌
- 朝風会展(康毛正三、能登正智、鈴木
善公、沼田卓、大友一夫)
4/23〜27 苫小牧画廊
- 大友一夫油画展
9月予定 平取町中央公民館
- 土門絵美子グラフィック個展
4/28〜5/3 大同ギャラリー 札
幌
- 北岡文雄個展
5/6〜23 世界銀行ギャラリー ワ
シントンDC
6/4〜19 ニューヨーク 日本クラ
バにて個展開催・渡米
- 鶴川五郎油絵個展
5/19〜24 時計台ギャラリー 札幌
- グループ展・プリントアート・アドベ
ンチャー(北海道立近代美術館) 越谷
賢一 5/31〜6/11
- 木村富秋個展
6/16〜21 時計台ギャラリー 札幌
- 第14回繚展(染グループ)
6/17〜22 ギャラリー照光館・函館
- 竹内豊個展
6/30〜7/5 時計台ギャラリーA
B室 札幌
- 土屋千鶴子個展
7/14〜19 時計台ギャラリー 札幌
- 渡辺真利個展
2/10〜15 東京地球室ギャラリー
企画個展
7月中旬 サンプラザ 苫小牧
8/11〜16 大同ギャラリー 札幌
- 八木保次個展
7/14〜19 大同ギャラリー 札幌
- 千葉幸子個展
7/14〜19 時計台ギャラリーB室
札幌
- 第15回彫刻家集団北斗会展
7/24〜29 丸井今井 函館